

令和5年度「看護補助者とのタスクシフト/シェアにチャレンジ」

所属施設 医療法人並木会 並木病院

担当者氏名 小野寅雄

| | |
|-------|--|
| テーマ | 食事介助のタスクシェアの取り組みについて |
| 現状と課題 | 夜勤看護職員の食事介助におけるストレスが増大している |
| 目的 | 多職種との協働により食事介助のストレスが軽減する |
| 評価指標 | 聞き取り調査 |
| 計画と経過 | <p>現状分析から夜勤従事している看護職員が朝食介助時にかなりのストレスを抱えていることが分かった。朝食時間のマンパワーの増員を考えたが、看護部だけではクリアできない課題であった。そのため、他職種からの応援ができないかとの発想から当院の強みでもあるリハビリ部に相談・交渉を持ち掛けてみる事にした。</p> <p>計画は、リハビリ部との交渉において言語聴覚療法士（以下、STと略す）の食事介助への参入ができなかととの相談および依頼をした。その交渉の中では、やはり職域から「食事介助」には抵抗感が強くあった。そこで、嚥下評価の一環で食事介助ができないかとの交渉をしたところ、先ずは昼食の時に嚥下評価をするという名目で食事介助に同席してもらおうところから始めた。その後、STは、徐々に食事介助に快く参加してもらえるようになった。そして、看護師・介護士とSTが昼の食事介助にあたる事ができるようになった。同時に、看護職員には、STは「嚥下評価」が主であることを念頭に置きながら食事介助の一員になってもらっていることを再認識させた。このことは、STには非常に重要なキーワードとなっているためである。</p> <p>STが、食事介助に入ることがルーチンになった時点で、本来の目的であった夜勤帯での朝食介助時のマンパワー不足の応援をしてもらうためとして、病院幹部にリハビリ部の勤務形態に「早出勤務」を追加してもらう事を交渉し、STの早出勤務のパターンを追加して頂いた。そして、STが朝食介助に就けるように環境を整え、臨床現場に実践配置できるようになった。</p> <p>現在では、入院患者の中で食事介助が必要な方が多くなり、夜勤看護職員の業務量が増えてきた時にスポット的に勤務を変更して頂き臨機応変な勤務で朝の忙しい時間帯をSTと協働して乗り切っている現状です。</p> |
| 結果と考察 | <p>近年の医療情勢から慢性医療を担っている医療療養型病床にも重症な患者の入院が多くなっています。その中で患者本人や家族のACPをお聞きすると、「できるだけ今までのように食事をしたい」とのお気持ちを確認するケー</p> |

スが多々あります。しかし、入院患者の摂食・嚥下機能は、廃用が進んでいる方や疾患による嚥下障害などで誤嚥のリスクの高い状況の患者が多くなっています。そのような中で朝の忙しい時間に食事介助をしている看護職員の声として「もう少し時間に余裕があればスプーン1さじでも食べて頂けるように介助できるのに」また、「こんなに忙しくては、誤嚥・窒息させてしまうかもしれないので不安です。」などの意見が多くありました。今回、このSTとの食事介助におけるタスクシェアを行ったことで看護職員からは、「今まで時間との戦いで精神的にも追い込まれていた、気持ちが少し楽になった。」との意見が聞かれるようになりました。また、「摂食嚥下の専門家がいることで、嚥下評価をして頂きながら食事介助をしてもらえるので安心です。」「朝の忙しい時間帯に一人でも多くのスタッフが欲しい中、STがともに食事介助に携わってもらえるのでうれしい。」など夜勤の看護職員からはたいへん良い意見が聞かれています。ただ単にマンパワーの増員で対処したのとは違った「安心」「安全」といった効果も夜勤スタッフの言動から察知できました。

この食事介助におけるタスクシェアのヒントとなったのは、当院ではリハビリ職員のリハビリセンターへの搬送業務のタスクシェアをいち早く導入していたことからです。チーム医療・働き方改革が叫ばれる今、われわれ医療職が協力して患者のためにより質の高い医療サービスを提供できるかが課題であり、その課題克服のためにはわれわれ医療職として働く者が、いかに生き生きと医療サービスを提供することが大切であると考えます。そのために必要な事として、「優しい心」や「心に余裕」をもつことが肝心であると考えます。この「優しい心」・「心の余裕」をもつ、持たせるための管理には、このタスクシフト/タスクシェアをいかに有効に機能させるかが肝心であり、その方法を有効にするためには、ある特定の職種が一方的な考えを押し付けたり、一方的な依頼だけでは円滑に進まないと考えます。お互いの職種が相互理解をしたうえでお互いの職種をリスペクトして認め合い、「通じ合える」関係性が構築できてようやく本来のミッションが成就すると今回のタスクシェアを進めるにあたり痛感しました。